

## 燃えるということ

「燃える」というテーマを頂いたが、さてどのように燃焼させたものか？ 打ち揚げ花火のように、ドカンと音を立ててパッと爆発させるのか、それとも煙草をくゆらすように、静かにしずかにくすぼらすのか。

### 線香花火

和紙を赤と白のダンダラ模様によって、その先にごく少量の火薬を捻りこんでおく。五〜六本束にして駄菓子屋で売っていた。暗闇になるのを待ちかね、裏庭で点火した。

ジュジュとかすかな音を立てるが、やがてビー玉ぐらいの大きさに赤い玉ができる。そいつを落としたらもう駄目、落ちないようにじいっと指先に力を入れて支えている。



堀田 吉雄

待つことしばし、やがて勢よくシュッシュッと火花を四方八方に弾き出す。あざやかに暗闇を截って燃えるのである。それを見つめる幼児の眼も闇夜に輝くのだ。

### 原子の火

この恐ろしい火は、プロメテウスもご存知なかったんじゃないか。こいつを考え出した悪魔に呪いあれ！

### 君は今燃えているか

テレビだったか、新聞の広告だったか、ちらっと見た文句だ。『日本は燃えているか』というタイトルの本も広告も見たいように思うのだが。「燃える」ということも近頃はやる言葉なのだろうか。おかげで干からびかかった老骨も燐火をともしことになった。

理屈をいえば、くっちゃんね、くっちゃんねの生活でも、

朝昼晩と食事をとって、一日のエネルギーを燃さないことには、手足が動かないであろう。

若いころには恋に燃えるだろうし、社会人となつては、仕事に打ちこんで、懸命に歯車を廻転さすにちがいない。

老いるということは、燃え尽きて死灰と化すことか。

### 萌える

私は、若いころ、長男が生れた喜びに、この萌という字を拵んで名づけた。まだ漢字制限がやかましくなかった時代だった。迷惑したのは子供で、しばしば「あなたの名は何と読みますか」と質問された。

### 執念のほむら

燃え方にもいろいろある。曾我五郎・十郎の兄弟は、十八年の長い月日を親の仇討に肝胆を碎いた。道成寺縁起の女は、蛇体と化して日高川を渡り、鐘を七巻きして、執念の炎を燃したと語る。

空海・最澄などの渡唐求道者は、すさまじい執念をつらぬいて、仏の道を探求した。西遊記の主人公は、もっと激しい情熱を燃して、シルクロードを往復したに違いない。

私の郷土の学者・谷川士清こしよかとか、本居宣長なども、どんなにか研究意欲を燃え揚らせたことであろう。指向の方角は様々だが、英雄豪傑・偉人・達人などといわれる人々は、不屈の心火を燃やし続けた人々に外ならないだろう。しかし燃えると、燃やすは同一か？

### 鬼

オニという国語は、いろいろ多義に使用される。「心を鬼にして……」という場合は、忍ぶ力の強さをいうものらしい。忍び難いことにもよく堪える。それが鬼だ。

また、激烈に執念を燃やすことを、何々の鬼とも表現する。事業の鬼とか、研究の鬼などと呼ぶ。

オニゴトという遊戯がある。鬼は巨大な火のかたまりのような怪物であっても、眼が見えぬかして、この遊びでは、鬼になった者は、手拭いなどで眼かくしをされる。鬼さんこちら、手の鳴る方へ。とはやし立てると、鬼は両手をいっぱいひろげて、仁王立ちになり迫ってくる。早く誰でもよいから子供をつかまえようと追っかけまわる。

危険を承知で、ここだここだと鬼をからかうのが、オニゴトの妙味だ。幼児は遊戯としては、なかなか運動量

も多い。

近世のオニゴトは、中世に始まった「子取る子取る」に起原を發したのかと思う。子供というものは、常に何かに夢中になって、それをあくまでも追求するものだ。

### 濡れ雑巾

こいつは、煮ても焼いてもなかなか燃えにくいものだ。人間にも濡れ雑巾のようなものがあって、笑わそうと努めてもいっかな笑わず、怒らそうと思っても、全然手ごたえがない。何を考えているかわからず、これ困るんだな。

### 消し炭

昔は、どの台所にも火消し壺というものがあつた。料理にも暖房にも木炭が用いられたから、真ッ赤に燃え盛っている火に水をかけて、ぼいとこの壺に投げこんでフタをして置けば、ケシズミとして再利用ができた。ケシズミは、そのままでは黒色を呈し、沈黙を守っているが、けしかけても眠りをさまさすと、真ッ赤に燃えあがってくる。コークスの火力は強いものだ。

白けていても、内に燃える力を納めているわけである。どこやら教育の姿にも似通っていないだろうか。ケ

シズミのようにシラけている奴をかつかと燃えあがらせるのが、教授法だ。

### 仙人

もつとも燃えない人間があるとすれば、それは仙人であらうか。それでも列仙伝などを讀むと、仙術の奥儀を極めるまでには、苦勞をするものらしい。久米仙などは、娑婆ッ気が過剰で、ついに通力を失い、下界にまっさかさまで醜態をさらけ出した。

だが、仙人を廃業して下賤の洗濯女と案外幸福に暮したかもしれない。燃えるが是か、燃えないが非か、計量する尺度がない。

### ダビ

私などよい年をして、いまだに名利に執着し、あくせくと暮している。まことにお恥かしい次第である。

息の根が止まれば、ダビに付そうが、はげタカについばまそうが、熱くも痛くもない筈である。しかし、火葬を嫌う人たちの中には「俺は死んでも焼かれたくない。土葬してほしい」と、遺言する人々は、ずいぶんあるものという。ダビこそ最後に燃えるものだ。